

もつきらば開始運用

警戒レベル

避難所の改善急務

いのちを守る

検証 西日本豪雨
フォーラムを前に ③



警戒レベルによる情報発信について中国地方の自治体担当者から質問が相次いだ説明会（4月26日、広島市中区）

な防災関連情報のガイドラインに関する国の説明会。出席した中国地方の自治体担当者から、質問や不安の声が相次いだ。

「住民の間に『分りにくい』という声が出ている」「国として周知を進めていくのか」。4月下旬、広島市中区であった、新たな

この梅雨シーズンから、大雨時などに出される防災情報が変わる。国がまとめた新ガイドラインを基に、自治体などは5段階の「警戒レベル」で住民に危険度を知らせる。避難を呼び掛ける従来の「避難勧告」や、

勧告より危険度が高い「避難指示（緊急）」はいずれも「警戒レベル4」となる。「周知期間短い」

見直しは昨年7月の西日本豪雨が契機になった。被災各地で避難の遅れが続出。避難や気象に関する用語が難解との声が各地の住民から上がった。広島市が豪雨後に設けた検証会議による住民アンケートでは、

8割近くが避難勧告を「認識・入手した」と答えた一方、実際に逃げた人は約2割。近づくが避難勧告を「認識・入手した」と答えた一方、実際に逃げた人は約2割、梅雨入りまでに5段階

警戒レベル別の防災情報・避難行動

警戒レベル	防災関連情報の例	住民が取るべき行動
5	災害発生情報	命を守る最善の行動を取る
4	避難指示(緊急)、避難勧告	速やかに全員避難
3	避難準備・高齢者等避難開始	避難の準備を進める。高齢者たちは逃げる
2	洪水注意報、大雨注意報	自分の避難行動を確認する
1	警戒級の大雨が降る予報	災害への心構えを高める

中国新聞社は「いのちを守る 防災フォーラム 早めの避難のために」を12日午後1時から、広島市中区土橋町の中国新聞ホールで開催します。入場無料、事前申し込み不要。中国新聞社報道部 20082 (2019) 232233。

「直感的な分りやすさを目指した」（内閣府）という5段階化。ただ、現在の避難情報の意味も浸透し切っていない中での見直しに、自治体に懸念が広がる。「周知期間が短い。住民が混乱してしまうかもしれない」。説明会に参加していた大竹市総務課防災係の松岡文明係長は心配する。

自治体の準備状況にはばつきもある。新ガイドラインが3月下旬に決まったため、梅雨入りまでに5段階

「すし詰め状態で、プライバシーも何もなかった」と当時、町内会長を務めていた民生委員の（72）。住民の安全を第一に、空振り覚悟で避難情報を出す姿勢を自治体が強めるからこそ、少しでも過剰しやすい避難所が必要と訴える。

「厳しい生活が強いられるという、避難所に付きまとうイメージが避難を妨げる一因」。被災者の行動分析を続ける県立広島大学院の江戸克栄教授（防災マーケティング）は指摘する。情報の伝え方の改善と「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

「避難の質」の向上が、早めの避難に向けた取り組みの両輪となる。

（災害取材班）